

藪の中

芥川 竜之介



一冊堂青空文庫

藪の中

芥川龍之介

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違い
ございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参
りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでござい
ます。あつた処でございますか？ それは山科やましなの駅路からは、四
五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦せ杉やの交まじつた、人ひと気け

のない所でございます。

死骸は縹はなだの水干すいかんに、都風みやこふうのさび烏帽子をかぶったまま、仰向けあおむに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなとは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居ったようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかったか？　いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて居りました。それが

ら、——そうそう、縄のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあったものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通かよう路とは、藪一つ隔たって居りますから。

検非違使に問われたる旅法師たびほうしの物語

あの死骸の男には、確かに昨日きのう遇あつて居ります。昨日の、――
さあ、午頃ひるごろでございましょう。場所は関山せきやまから山科やましなへ、参ろうと
云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山
の方へ歩いて参りました。女は牟子むしを垂れて居りましたから、顔
はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重はぎがさねらしい、衣きぬの
色ばかりでございます。馬は月毛つきげの、――確か法師ほうし髪がみの馬のよう
でございました。丈たけでございますか？ 丈は四寸よきもございました
か？ ――何しろ沙門しゃもんの事でございますから、その辺ははつきり
存じません。男は、――いえ、太刀たちも帯おびて居れば、弓矢たづさも携たづさえ
て居りました。殊に黒い塗ぬり箆えびらへ、二十あまり征矢そやをさしたの

は、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、
真まことに人間の命なぞは、如露亦如電にょろやくにょでんに違いございません。やれや
れ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしが搦からめ取った男でございますか？　これは確かに多襄丸
と云う、名高い盗人ぬすびとでございます。もっともわたしが搦からめ取った
時には、馬から落ちたのでございましょう、栗田口あわだぐちの石橋いしばしの上

に、うんうん呻うなって居りました。時刻でございますか？ 時刻は
昨夜さくやの初更しょこう頃でございます。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時に
も、やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りました。
ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類たすきさえ携たずえて居りま
す。さようでございますか？ あの死骸の男が持っていたのも、
——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。
革かわを巻いた弓、黒塗りの箠えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、——これは
皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおつ
しやる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございます。その畜生ちくしやうに落されると
は、何かの因縁いんねんに違いございません。それは石橋の少し先に、長

い端綱はづなを引いたまま、路ばたの青芒あおすすぎを食って居りました。

この多襄丸たじょうまると云うやつは、洛中らくちゅうに徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺とりべでらの賓頭盧びんずるの後の山に、物詣ものでに來たらしい女房もうが一人、女の童めと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業しわざだとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあゝの男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出さしでがましゅうございますが、それも御詮議ごせんぎ下さいまし。

検非違使に問われたる媼おんなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたづいた男でございます。が、

都のものではございません。若狭わかさの国府こくふの侍でございます。名は

金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立きだてで

ございますから、遺恨いこんなぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさご、年は十九歳でございま

す。これは男にも劣らぬくらい、勝気しょうきの女でございますが、まだ

一度も武弘のほかには、男を持った事はございません。顔は色の

浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりぎねがおでございます。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こ

んな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし

娘はどうになりましたやら、むこ婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございます。婿ばかりか、娘までも……………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

多襄丸たじようまるの白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきょうな隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなっただのですが、一つにはそのためもあつたのでしょう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたので

す。わたしはその咄嗟とっさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りっぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あばいて見たら、鏡や太刀ちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うづめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつ

かわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、――
―どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それか
ら半時^{はんとき}もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路^{やまみち}へ馬
を向けていたのです。

わたしは藪^{やぶ}の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来て
くれと云いました。男は欲^{かわ}に渴^{かわ}いていますから、異存^{いぞん}のある筈は
ありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。
またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありま
すまい。わたしはこれも実を云えば、思^つう壺^ぼにはまったのですか
ら、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町ほど行った処に、
やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、
これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けな
がら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきまし
た。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方
へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何
本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきな
り相手を組み伏せました。男も太刀を佩いているだけに、力は相
当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちま
ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄です

か？ 縄は盗人ぬすびとの有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんか
ら、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないために
も、竹の落葉を頬張ほおばらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急
病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これ
も凶星ずぼしに当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女いちめ
笠がさを脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて
来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられてい
る、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出していた
か、きらりと小刀さすを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あ

のくらい気性の烈はげしい女は、一人も見
た事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸たじようまるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすを打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、———そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の

外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋^{すが}りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥^{はじ}を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——そうも喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。

（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷^{げんこく}な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳^{ひとみ}を見ないか

からです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほか、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかったのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。

わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相けっそうを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利きかずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目ごうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、

女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事ごとは申し上げるだ

け、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だ
けはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。
どうせ一度は櫓おうちの梢こずえに、懸ける首と思っ
ていますから、どうか極ごく
刑けいに遇わせて下さい。（昂然こうぜんたる態度）

清水寺に来れる女の懺悔ざんげ

——その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしてしま
うと、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどん
なに無念だったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体中からだじゅうにか

かった縄目なわめは、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶころように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とつさの間に、わたしをそこへ蹴倒あいたしました。ちようどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿さとっているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みぶるいが出ずにはいられません。口さえ一言いちごんも利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃ひびいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さげすんだ、冷たい光だったではありませんか？　わたしは男に蹴さげすられたより

も、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑さげすみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られま
せん。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあな
たもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりま
した。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りませ
ん。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫
は忌いまわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたし
は裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しました。が、あの
盗人ぬすびとに奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には
見当りません。しかし幸い小刀さすだけは、わたしの足もとに落ちて

いるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしょう。やつ

とあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじった杉むらの空から、西日が一すじ落ちているのです。わたしは泣き声を吞みながら、死骸しがいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀さすを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢じまんにはなりません。（寂さびしき微笑）わたしのように腑甲斐ふがいないものは、大慈大悲の觀世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放し

なすったものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇ったわたしは、一体どうすれば好よいのでしょうか？
一体わたしは、——わたしは、——（突然烈すすりなきしき歔歔）

巫女みこの口を借りたる死霊の物語

——盗人ぬすびとは妻を手ごめになると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利きけない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云っても嘘と思え、——お

れはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然しやうぜんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたましさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻

は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有ちゆううに迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚しんいに燃えなかったためしはない。妻は確かにこう云った、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色がんしよくを失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと——しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あ

の人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪わのろしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然はとばし迸るごとき嘲笑ちやうしやう）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされた、（再びふたたび迸るごとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれ

の姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？　殺すか、それとも助けてやるか？　返事はただ頷けば好い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ぶが早い、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えなかったらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは

盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟いたのを覚えて
いる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がす
る。おれは縄を解きながら、じっと耳を澄ませて見た。が、その
声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではない
か？
(三度、^{みた}び、長き沈黙)

おれはやっと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前に
は妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとる
と、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊が^{なまぐさ}おれの口へこみ上
げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一
層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。

この山陰やまかげの藪やぶの空には、小鳥一羽さえず囀りに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そっと胸の小刀さすがを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮あふが溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有ちゆううの闇へ沈んでしまった。……………

（大正十年十二月）

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
